

最高位に大樹のエンブレム-K 十勝勢が上位席卷 道畜産共進会の乳用牛部門

2019年10月5日

第17回北海道総合畜産共進会（同実行委員会主催）の乳用牛部門が9月28、29の両日、胆振管内安平町で開かれた。ホルスタイン種・16部、ジャージー種・4部に分かれ、体形などを競った。最高位のグランド・チャンピオンには、大樹町のエンブレム-K（穀内和夫社長）の出品牛が輝いた。準最高位は小椋淳一さん（上士幌町）の出品牛。ジュニア、シニア部門でも十勝勢がチャンピオンを取るなど上位を席卷した。



グランド・チャンピオンに輝いた
出品牛と隆志さん

同共進会は4年に1度開催。胆振東部地震の影響で今年に延期になっていた。道内からホルスタイン398頭、ジャージー33頭が出品登録。20の部に分かれて審査した。道ホルスタイン農協の田井道広審査部次長がオフィシャルジャッジを務めた。

最高位に輝いたのはホルスタイン種第14部（4歳クラス）に出品した「エンブレムK スパークリング シエリー」。管理を担当する穀内隆志さん（33）は、今夏の猛暑の中で体調管理に気を使ったと強調。「ベストコンディションで出すことだけを考えた。勝ち負け以上に皆に『いい牛』だと評価されたことがうれしい」と喜びを語った。同社からはシニア・チャンピオンも輩出した。

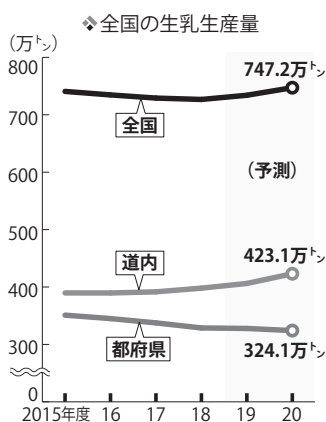
管内からは他に、小椋さんの出品牛が準最高位のリザーブ・グランド・チャンピオンとインターミディエイト・チャンピオンに選ばれた。ホルスタイン種のジュニア・チャンピオンには小椋直樹さん（上士幌町）、ジュニア部門準最高位のリザーブ・ジュニア・チャンピオンには高橋喜一さん（清水町）の出品牛がそれぞれ選ばれた。

ジャージー種でも、ジュニア・チャンピオンに小椋淳一さん、リザーブ・シニア・チャンピオンにエスティリアデイリーサービス（広尾町）の出品牛が入った。十勝勢はホルスタインとジャージーを合わせて上位賞12のうち八つを独占した。

道内生乳 4年連続増産か 3.3%増、423万1000トン 需要も堅調 Jミルク20年度需給見通し 都府県へ移出量拡大

2020年2月22日

牛乳乳製品の消費拡大に向けた調査分析などを行うJミルク（東京）は、2020年度の生乳、牛乳乳製品の需給見通しと課題を発表した。生乳生産は道内が4年連続で増産し、前年度比3.3%増の423万1000トンと予測。都府県の生乳生産量は0.7%減の見通しで、道内から都府県への移出量は増加するとした。道内分が全国の供給量の多くを担う様相がさらに強まっている。



19年度の生乳生産量は11月までの実績と見通し分を含めて全国で735万9000トン。20年度は全国で1.5%増の747万2000トンとなり2年連続の増産を予測した。北海道が全国の56.6%（前年より1ポイント上昇）を占める。都府県は0.7%減の324万1000トン。

生産基盤を強化する取り組みが奏功し、2年連続の増産に。国の助成による性判別精液の活用などで後継牛の確保が進んでいる。生乳を生産する2歳以上の乳用雌牛の頭数は、北海道は49万2000頭で、19年より1万頭ほど多くなるとした。都府県の生乳生産は前年を下回るが、2歳以上の乳用雌牛は19年より微増し、減産幅は縮小される。

需要量はバター向けをすべて国産でまかなうとした場合、0.8%増の778万6000トン。生乳生産は増えているが、酪農家の自家消費分を除く実際の供給量（742万7000トン）では、36万トンほど足りない状況になっている。

飲用向けは0.7%増の411万5000トンと堅調な需要で、夏場の飲用需要期は需給のひっ迫が予想される。道内から都府県への移出量は8.3%増えて59万1000トンとなり、Jミルクは「消費需要が堅調な中、道産への依存度が高まっている」とする。

十勝管内の生乳生産は19年度、ホクレン集計分で12月までに3.6%の伸びを記録。規模拡大や改良によって牛自体の能力が高まり、生産量が伸びている。

ホクレン帯広支所は「規模拡大と飼料の質の良さから、20年度も生乳生産は堅調な伸びとなるのでは」とみている。